



日本語・英語母語話者による英作文における動詞の テンス・アスペクトの頻度に基づく分析：意味を重 視した新しい枠組みを用いて

益田, 拓実

(Citation)

統計数理研究所共同研究レポート, 484:176-190

(Issue Date)

2026-03-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100502572>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100502572>



日本語・英語母語話者による英作文における

動詞のテンス・アスペクトの頻度に基づく分析

—意味を重視した新しい枠組みを用いて—

益田 拓実(神戸大学・大学院生)

259c122c@cloud.kobe-u.jp

A Study Based on the Frequency of Verb Tense and Aspect
in English Composition by English Native Speaker and Japanese Speakers
—Using a New Framework Focusing on the Meaning—

MASUDA, Takumi (Kobe University, Graduate Student)

概要

英語ライティングにおいては、動詞のテンス・アスペクトを正しく活用することが重要になるが、初級から中上級の段階にある日本語母語の学習者がそれらをどれだけ自然に使用できているかは必ずしもはっきりしない。そこで、本研究では、主に田川(2020)の定義をふまえ、テンスを現在時制・過去時制・未来、アスペクトを進行相・完了相・志向相と定義し、学習者コーパス ICNALE における日本語を母語とする英語学習者の使用実態を計量的に調査し、英語母語話者の使用実態と比較した。その結果、テンスの使用度に有意な差異は認められなかったが、一方でアスペクトの産出においては、日本語を母語とする英語学習者が志向相を過剰使用する傾向が見られた。得られた知見は、英語教材の開発や教授内容の精選に一定の意義を持つと考える。

キーワード

学習者コーパス、テンス・アスペクト、JLE

1. はじめに

英語ライティングにおいて、個々の動作や行為が時間軸の中で占める絶対的・相対的位置や、動作・行為の時間的ありようを正確に表出しようとする場合、現在形・過去形などのテンス(tense: 時制)や進行相・完了相などのアスペクト(aspect: 相)を自然な形で使用することは、非常に重要

である。英語母語話者は様々なテンスやアスペクトを組み合わせることで、ほぼ無意識のうちにこうした時間的情報の処理を行っているが、こうした処理は非母語話者には大きな課題となりうる。

たとえば、以下は CNN に掲載された記事の一部である (France, 2026)。

If you've spent any time online, you've probably heard the phrase "you don't know ball" used to point out a lack of knowledge. It seems that some of those complaining most loudly about Bad Bunny being picked to headline the Super Bowl LX halftime show don't know ball. At least, they don't seem to know that the National Football League (NFL) is not new to global superstars, nor controversy. The Puerto Rican "DeBi TiRAR MaS FOToS" singer's selection has come with both – but will also bring more eyes from around the world onto the sport in a way the league has been craving. The NFL's quest to bolster its international fan base has been the driving force behind having more games played abroad, according to Sam Sanders, host of KCRW's "The Sam Sanders Show." The league has been "seeing what's happening with FIFA and with the World Cup and the way that soccer is truly an international sport and saying, "We want that too," he told CNN.

上記の例では、現在時制が 7 回、過去時制が 1 回、法助動詞が 1 回、進行相が 3 回、完了相が 6 回使用されており、特に完了相の使用が多く見られる。これは、過去のある時点の動作や状態が現在に関連または継続していることを表している。

上記の例が示すように、英語の文章では、さまざまなテンスやアスペクトが使用され、それぞれの動作や状態を多様に表す。時間や出来事の捉え方そのものが両言語で異なることが、日本人学習者が英語のテンス・アスペクト使用を難しく感じる根本的な要因であると考えられる。

しかしながら、こうしたテンス・アスペクト使用に関して、日本人学習者が実際にどの程度の問題を抱えているのか、英語母語話者とどのような違いがあるのか、また、学習者の習熟度の上昇に従ってそれらの使用パターンがどのように変化していくのか、という点について、大量の学習者産出データを根拠とした科学的な分析はいまだ十分になされていない。

そこで、本研究では、大規模英語学習者コーパスを使用し、日本語を母語とする、4 つの習熟度段階にある英語学習者、英語母語話者による作文において、テンス・アスペクト使用にどのような差があるかを、主として計量的観点から記述的に調査することを目指す。

2. 研究背景

2.1. 基本概念の整理

英語のテンス・アスペクトとその定義については、英語学や英語教育学において多くの研究がなされてきた。三宅(2015)は、「英語の時制と相の関係を考える際、動詞の活用と統語構造のみを判断基準とする区別では不十分であり、多元的枠組みが必要である」と述べており、実際、英語学

においては、テンス・アスペクトの各々に関して、さまざまな定義や機能分類が試みられている。この点を踏まえ、以下ではまず、テンス・アスペクトの各々について代表的な定義を確認していきたい。

2.1.1 テンス(時制)

Leech and Svartvik (2002) は、テンスとは動詞の形と時間の概念(過去・現在・未来)との対応関係を指し、英語には現在と過去の2つの単純時制があると述べている。また、Comrie(1976)はテンスには“absolute tense(絶対時制)”と“relative time reference(相対的時間表現)”があると主張する。絶対時制とは、発話の瞬間を基準として、動作や出来事の発生する時間を直接示す表現である。また、相対的時間表現は、ある動作や出来事の時間を他の動作や出来事との時間的な関係によって示す表現である。相対的時間表現の例として分詞構文の分詞部分の時制が挙げられ、主節の時制を基準に決定される。また、単純過去形でも完了相の意を示す場合があると述べている。

田川(2020)は、時制を主語—述語のペアを時間軸に固定するためのものと捉え、現在時制を「発話時よりも現在」、過去時制を「発話時よりも過去」に固定するものとした上、will などの法助動詞を、「モダリティのある時制」を表現するものと定義し、「発話時よりも未来」に固定するとしている。すなわち、テンスには現在時制、過去時制、および法助動詞を用いたいわゆるモダリティ時制があり、この構造は次節のアスペクトを構成する志向相・進行相・完了相と同じように、3層の構造となっている。

本研究では、三宅(2015)の言う「多元的な枠組み」を重視し、田川(2020)と同様に、テンスを法助動詞・現在時制・過去時制の3つによって構成されていると定義する。法助動詞は、続く動詞が発話時よりも未来となる意味を持つ will, can, may, should, must を扱うこととする。

2.1.2 アスペクト(相)

アスペクトとは、事態が話し手によってどのように捉えられるかを表す文法項目であり、英語では進行相や完了相といった形式を通じてその区別が表されるとされている(Leech & Svartvik, 2002)。Comrie(1976)は、アスペクトを状況の内部的な時間的構成要素を見る様々な方法として定義づけている。

田川(2020)は、「アスペクトが表す事象時間軸上の位置は、発話時ではなく、先行動詞の時間軸上の位置との相対的な関係性で決まっている」(p.89)と述べ、分詞を使用している文にはアスペクトがあるとした。また、「分詞であるための4条件」として、(1)先行する動詞から見て相対的な時間表示をすること、(2)名詞に付着して修飾し、より大きな名詞句をつくること、(3)形態素が動詞の原型とのみ結合して形成されること、(4)否定される際は not の後ろに現れることの4点が挙げられている(p.58)。これを満たす分詞は、「先行動詞と同時」である進行相(先行動詞+現在分詞)、「先行動詞より過去」である完了相(先行動詞+過去分詞)、「先行動詞より未来でモダリティがある」志向相(先行動詞+to不定詞)の3つであり、前述の3つのテンスと相似的であると言える。また、伝

統的な文法観では、“be 動詞+現在分詞”が進行形で、“have/has/had+過去分詞”が完了形とされるが、田川(2020)は、これらはそれぞれ進行相・完了相に内包されると捉えた上、“have to 不定詞”と“be to 不定詞”の2つを志向形と定義した。

本研究では、テンスの定義と同様に、田川(2020)の定義を参考に、アスペクトは志向相・進行相・完了相の3つによって構成されていると定義する。志向相は、“decide to 不定詞”などの“先行動詞+不定詞”と、“want+人+to 不定詞”などの先行動詞と to 不定詞の間に to 不定詞の意味上の主語が挿入されている構文を扱うこととする。また、志向相の対象となるのは、to 不定詞が未来の意味を明らかに含意する場合のみで、“begin to do”などは含まないこととする。進行相は、伝統的な進行形(主語+be 動詞+現在分詞)に加え、主語+kept doing など、伝統的な進行形と同じように主語=doing しているという関係が成り立つ例を対象に含むこととする。

2.2 主な先行研究の概観

L2 及び L1 の英語話者により産出される英語のテンス・アスペクトの使用を分析するにあたり、英語という言葉におけるテンス・アスペクト使用の重要性、英語母語話者によるテンス・アスペクトの産出の計量的な分析、L2 英語話者による英語のテンス・アスペクトの産出の計量的な分析について、先行研究の知見を概観する。

Thakur et al. (2021) は、英語のテンス体系を談話・コミュニケーションの観点から再検討し、従来の指導においてテンス(形式)、タイム(意味的時間参照)、アスペクト(行為の完了性)が混同されがちであることが学習者の理解を阻害していると指摘した上で、これら三概念を明確に区別して捉えることが伝達の正確性を高めるために不可欠であると論じている。

Biber (1993) は、イギリス英語の書き言葉(LOB コーパス)および話し言葉(London-Lund コーパス)に基づくレジスター多様化コーパスを用いて多次元分析を行い、過去時制や完了アスペクトが物語的レジスター(フィクション)と強く結びつく一方、現在時制は非物語的・解説的レジスターにおいて他の言語特徴と共起しつつ相対的に高頻度で使用されることを示した。

Wang, Wang, & Wang (2024) は、ICNALE コーパスに基づく中国語および日本語母語の英語学習者による英作文を対象に計量的分析を行った結果、進行形の使用において習熟度の向上に伴い動詞多様性と生産性が増加したことを明らかにした。以上で見てきたように、テンス・アスペクトの言語伝達において重要であること、特定のテンス・アスペクトの産出には一定の傾向があることが明確となった。

先行研究では、過去形・進行形・現在完了など特定のテンス・アスペクトに焦点を当てた分析が多くなされてきた一方、英語を外国語とする学習者のテンス・アスペクト産出を同じ枠組みの下で包括的に捉える実証研究は、限定的である。さらに、先行研究の多くは伝統的なテンス・アスペクトの枠組みに基づく分析にとどまっており、多元的視点を導入してテンス・アスペクト現象を捉え直す試みは限定的である。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的と RQ

時制や相の多様性の欠如が実際に存在するかどうかを実際のデータで検証し、日本人の抱える問題と対処の方向性を明らかにする。最終的に教育的提言をし、日本人の時制や相の多様な使用を促進させる教材開発を行う。

以上の目的に沿い、以下の 2 種の研究設問 (RQ) を設定する。

RQ1 3 種のテンスの使用度は、習熟度を異にする JLE および ENS でどのように変化するか。

RQ2 3 種のアスペクトとアスペクトなしの動詞の使用度は、習熟度を異にする JLE および ENS でどのように変化するか。

RQ3 12 種の時制・相の組み合わせパターンは、習熟度を異にする JLE および ENS でどのように変化するか。

3.2 データ

3.2.1 ICNALE (The International Corpus Network of Asian Learners of English)

アジア圏英語学習者コーパス (The International Corpus Network of Asian Learners of English)、略称 ICNALE は、話し言葉・書き言葉を含む計4つのモジュールのデータが収録されているコーパスである。

近年の応用言語学では伝統的なネイティブ・母語という表現は、安易に依拠することに対して批判されている。ICNALE では母語話者の多様性を重視し、ENS_1~3 と区別することにより、ENS を狭く絶対的な基準ではないということを心がける。ただし、母語話者という言葉に変わる実用的に使用できる用語は存在しないため、本研究ではそれを用いる。Granger (2015) の提唱する改訂版中間言語対照分析 (Contrastive Interlanguage Analysis 2: CIA2) の観点に基づき、参照データおよび学習データの双方に存在する内部的なばらつきや多層性を考慮し、母語話者データは職業属性の差、学習者データは習熟度や地域・母語の差を含めて比較する。

学習者は Common European Framework of Reference for Languages (Council of Europe, 2020) に基づき、習熟度テスト受験者はそのスコアによって、未受験者は共通語彙サイズテストのスコアをもとに A2・B1_1・B1_2・B2+ に区分された。英語を外国語とする学習者 1900 名 (EFL)、英語を第 2 言語とする学習者 700 名 (ESL)、英語母語話者 200 名 (ENL) が参加した。JLE の内訳は、A2 (154 名)、B1_1 (179 名)、B1_2 (49 名)、B2+ (18 名) で、ENS は 1 (大学生; 200 名)、2 (英語教員; 88 名)、3 (一般の社会人; 112 名) に分類される。執筆時間を 20~40 分、1 作文の長さを 200~300 語とし、PTJ「大学生がアルバイトをすることは重要」と SMK「自国のレストランにおける喫煙は禁止されるべき」の 2 つのトピックについて作文した。本研究では、JLE 全体 (400 名) と ENS_1 (200 名) による「大学生がアルバイトをすることは重要」のみを分析対象とする。

3.3 手法

English 3.3 for Tree Tagger pipeline によるタグ付けデータを使用し、主に下記のタグを用いて頻度を抽出する。ENS の頻度を基準とし、習熟度別の日本語母語話者の頻度を疑似縦断的に考察する。

また、統計手法には単回帰分析 (regression modeling) を用いる。単回帰分析とは、説明変数を、直線モデルを使って解析する統計手法で、 R^2 はモデルがどれだけデータを説明できているかを示す指標となる。0~1 の間で変動し、値が高いほど妥当性が高い。

使用する品詞タグの一部は表1の通りである。単純現在形・単純過去形以外のカテゴリは、使用した品詞タグが非常に多数のため、使用頻度が上位2位の品詞タグを抜粋した。

表 1

使用する品詞タグ (一部抜粋)

	相なし	進行相	完了相	志向相
	単純現在形	現在進行相	現在完了相	現在志向相
現在時制	[VBP] / [VBZ] / [VVP] / [VVZ]	[VBP] [VVG] / [VBZ] [VVG]	[VHP] [VVN] / [VBP] [VVN]	[VHP] to [VV] / [VVP] to [VV]
	過去形	過去進行相	過去完了相	過去志向相
過去時制	[VBD] / [VVD]	[VBD] [VVG] / [VBD][a*][VVG]	[VBD] [VVN] / [VHD][VVN]	[VVD] to [VV] / [VHD] to [VV]
	未来	未来進行相	未来完了相	未来志向相
未来	can [VV] / should [VV]	will be [VVG] / must be [VVG]	will be [VVN] / should be [VVN]	will have to [VV] / will [VV] to [VV]

RQ1 の分析では、4 つの習熟度段階の JLE、および ENS による各テンス (現在・過去・未来) の使用の実頻度を調べる。その後、相互比較が可能になるよう、「10 人あたり調整頻度」を求める。さらに、テンス全体における各テンスの比率を比較できるよう、テンスごとに構成比を求める。また、JLE の習熟度の変化が「10 人あたり調整頻度」に及ぼす変化を探るため、線形回帰分析を行い、回帰式の係数と、説明力をあわせて調べる。

RQ2 の分析では、RQ1 と同様に、4 つの習熟度段階の JLE、および ENS による各アスペクト (相なし・進行相・完了相・志向相) の使用の実頻度を調べる。その後、相互比較が可能になるよう、「10 人あたり調整頻度」を求める。さらに、アスペクト表現全体 (相なしを含む) における各アスペクトの比率を比較できるよう、アスペクトごとに構成比を求める。また、JLE の習熟度の変化が「10 人あたり調整頻度」に及ぼす変化を探るため、線形回帰分析を行い、回帰式の係数と、説明力をあわせて調べる。

RQ3 の分析では、RQ1 および RQ2 と同様の手順に基づき、3 種のテンス(現在・過去・未来)×4 区分の Aspekte(相なし・進行相・完了相・志向相)の計 12 パタンについて、表 1 に示した品詞タグ列に基づき実頻度を抽出する。その後、各パタンについて「10 人あたり調整頻度」を求め、習熟度段階間および ENS との相互比較が可能となるよう整理する。また、習熟度上昇に伴う各パタンの増減傾向を検討するため、RQ1 と同様に、JLE の 4 つの習熟度を説明変数、各パタンの 10 人あたり調整頻度を目的変数とみなして線形回帰分析を行い、回帰式の係数と決定係数を参照しつつ考察する。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 テンスの使用度

まず、異なる習熟度段階の JLE および ENS が、3 種のテンスをどの程度使用しているか調査したところ、表 2 の結果を得た。頻度については、分析に用いる 10 人あたり調整頻度に加え、括弧内にコーパスから計測された実頻度を付記する。また、テンス表現全体に占める各テンスの割合を構成比として記載する。さらに、JLE の 4 つの習熟度を説明変数、各レベルの 10 人あたり調整頻度を目的変数とみなして線形回帰分析を行い、得られた回帰式とその説明力 (r^2) をあわせて記載する。

表 2

JLE と ENS の 3 種のテンス産出の調整頻度および構成比

	現在		過去		モダリティ時制 (未来)		
	調整 頻度	構成比	調整頻 度	構成比	調整頻 度	構成比	
書き手 群	A2	195.98 (3018)	71.21%	17.40 (268)	6.32%	61.82 (952)	22.46%
	B1_1	186.37 (3336)	69.82%	17.82 (319)	6.68%	62.74 (1128)	23.50%
	B1_2	194.69 (954)	72.27%	19.38 (95)	7.19%	55.31 (275)	20.53%
	B2+	194.45 (350)	71.28%	13.89 (25)	5.09%	64.44 (117)	23.62%
	JLE 平均	192.87 (1915)	71.15%	17.12 (177)	6.32%	61.08 (618)	22.53%
	ENS	74.10 (1482)	68.87%	7.70 (154)	7.16%	25.80 (528)	23.98%

以下では、3つの観点に絞って概観を行いたい。1点目はJLEの全習熟度平均値に注目すると、すべてのテンスについて、ENSを大きく上回っているということである。このことは、JLEには動詞そのものの過剰使用傾向があること、つまり短い節または文を多く産出していることを意味する。

この点について以下の用例を分析する。“I don't have a part time job now. But I can live enough now. And, college students have to study. But to have a part time job is not only for to get money. It is good social studies. (WE_JPN_PTJ0_391_A2_0)”このA2レベルのJLEによる作文の一部では、このようにそれぞれの文が短く途切れており、以下に見るENSの作文とは大きく異なるものである。“I work at a small local restaurant, and I have learned a lot there which I probably could not have learned if I had only gone to school. For instance, I have learned how to cook a variety of foods, and I have also learned how to interact with customers in a professional and polite way. (WE_ENS_PTJ0_054_XX_1)”このENSによる作文は、関係代名詞のwhichやifなどの副詞節を作る接続詞、andなどの等位接続詞、そして“in a professional and polite way”のような前置詞+名詞を用いてさまざまな事柄を説明しながら文が形成されており、抽象的な概念・一般論を多く語るJLEとの1番大きな差であると言えるだろう。

2点目は、同じくJLEの構成比の平均値に注目すると、3種のテンスの構成比上の順位関係は、現在(71.15%)>未来(22.53%)>過去(13.32%)となっており、これはENSの順位関係—現在(68.87%)>未来(23.98%)>過去(12.75%)—と一致しているということである。このことは、JLEが3種のテンスについておよそENSと同等の言語知識または感覚を有していることを意味する。また、JLEが過去形や未来といったテンス表現を使えていないわけではないこともあわせて示唆する。

この点について、以下の用例を参照する。“It is only a matter of time until he comes back to save all of us, and the people who have been frittering away their time an ungodly pursuits will not ascend to heaven. This is what I was taught to believe (WE_ENS_PTJ0_048_XX_1).”このENSによる作文では、現在・過去・未来がそれぞれこの2文のうちに使用されており、時間関係をうまく整理していると考えられる。“And I bought books and clothes I wanted with the money. Then I sometimes bought something I didn't really need. [...] They are college students, women who have children and men who got married. Therefore I communicate with many kinds of people. [...] And I always do something I must do now. For these reasons I agree with the following statement "It is important for college students to have a part-time job. " And I'll have many kinds of part-time jobs from now on (WE_JPN_PTJ0_108_A2_0).”一方で、このA2レベルのJLEによる作文では、過去の経験→一般論→今後の話題という流れで作文全体が構成されている。各テンスの構成比はJLEとENSで近いが、文章の構成方法という点において、細かく時間関係を整理するENSと文章全体での時間整理を図るJLEで傾向に差が生じた。

最後に、3点目は、JLEの習熟度変化に伴い、各テンスの調整頻度が比例して動いているわけではないということである。このことは、それぞれの調整頻度がレベル間で増加や減少を繰り返していることにも示される。また、現在・過去・未来のそれぞれの回帰式と回帰係数は順に、 $y=0.373x + 192$ ($r^2=.012$)、 $y=-0.897x + 18.5$ ($r^2=.250$)、 $y=0.043x + 61$ ($r^2=.000$)となるが、いずれの場合も回帰式の説明力は0に近い値になっており、習熟度の上昇とテンス使用の間に有意な相関関係は認められなかった。

以上をまとめると、RQ1(3種のテンスの使用度は、習熟度を異にするJLEおよびENSでどのように変化するか。)に関して、(1)動詞そのものの頻度はENSに比べてJLEがきわめて高いこと、(2)JLEとENSの3種のテンスの構成比に大きな差はないこと、(3)習熟度とテンス使用に有意な相関関係はないことが結果として得られた。

4.2 RQ2 アスペクトの使用度

個々のアスペクトの産出傾向を分析する前に、4段階の習熟度のJLEとENSが、どのような割合でそれぞれのアスペクト使用の傾向をしているのかを概観する。テンスの場合と同様に、表3にアスペクトの調整頻度(括弧内に実頻度)および産出の構成比をそれぞれ示す。

表 3

習熟度別 JLE と ENS のアスペクト産出の調整頻度および構成比

		相なし		進行相		完了相		志向相	
		調整 頻度	構成比	調整 頻度	構成比	調整 頻度	構成比	調整 頻度	構成比
書 き 手 群	A2	249.36 (3840)	90.61%	3.64 (56)	1.32%	9.68 (149)	3.52%	12.52 (193)	4.55%
	B1_1	242.68 (4344)	90.82%	4.47 (80)	1.67%	9.45 (169)	3.54%	10.61 (190)	3.97%
	B1_2	242.86 (1190)	89.88%	6.12 (30)	2.26%	8.16 (40)	3.02%	13.06 (64)	4.83%
	B2+	251.11 (452)	91.87%	3.89 (7)	1.42%	7.22 (13)	2.64%	11.12 (20)	4.07%
	JLE 平均	246.50 (2457)	90.79%	4.53 (43)	1.67%	8.63 (93)	3.18%	11.83 (117)	4.36%
	ENS	90.55 (1811)	83.69%	4.50 (90)	4.16%	8.55 (171)	7.90%	4.60 (92)	4.25%

まず、1点目として、表3におけるJLEの平均とENSの各アスペクトの調整頻度に注目すると、「相なし」・志向相はJLEがENSを著しく上回っていることが明らかとなり、また、進行相・完了相

については、調整頻度には大きな差はないが、絶対数が多いことを踏まえると、JLE が相対的に ENS より少ないことが考えられる。

志向相については、JLE、ENS ともに、“I don't want to ask my parents to help me. (W_JPN_PTJ0_397_B1_1)” のような、“want to”や“need to”といった表現を主に多用している。JLE は志向相を過剰使用しているものの、その用例の内訳は ENS と大きな差異は認められなかった。例えば、“一般動詞+to do”(“to do”は未来を含意する)の合計頻度を全体とした時、“want to”、“wants to”、“wanted to”の使用頻度は、JLE が 95.56%で、ENS の 88.1%を少し上回っているのみである。

しかしながら、依然として、志向相を JLE がアスペクトの中で唯一過剰使用する原因は、まさにこの定型化した表現の過剰使用にあると考えられる。それは、“want to”、“wants to”、“wanted to”の ENS の 10 名あたりの使用が 1.85 回である一方で、JLE は 10 名あたり 5.375 回であるためである。今後の研究では、JLE がどのような表現を過剰/過少に使用しているのかを解明するため、より詳細な頻度や用例に基づく分析が必要となる。これにより、JLE の志向相の過剰使用の要因を解明することができるだろう。

また、進行相・完了相の過少使用については、主に 2 つの原因が考えられる。1 点目は、JLE が一般論を多く記述するという点、そして、2 点目は、進行相・完了相で作られるべき内容の文を現在単純形や過去単純形で産出するという点である。一般論の多用と進行相の過少使用については、“we can select work and are likely to make an appeal for the experience at a part time job to the company. Then, we can also study the rule of society. When we spend times in our daily life, we have only chance to speak our friend, family and teacher (WE_JPN_PTJ0_114_A2_0).”にあるように、時間関係を整理しながら産出する内容というよりは、全て現在時制またはモダリティ時制で産出できる内容を取り上げていることが原因として考えられる。また、完了相使用の回避については、“Actually, I make some friends through a part-time job (WE_JPN_PTJ0_109_A2_0).”にあるように、過去に起きた事柄を現在につなげるニュアンスを持つ現在完了相を使用すべき場合にも現在時制を使用している用例が挙げられる。

2 点目としては、同じく JLE の構成比の平均値に注目すると、アスペクトの構成比上の順位関係は、相なし(90.79%) > 志向相(4.36%) > 完了相(3.18%) > 進行相(1.67%)となっており、これは ENS の順位関係一相なし(83.69%) > 完了相(7.90%) > 志向相(4.25%) > 進行相(4.16%)とは異なる結果となった。両者に共通しているのは、進行相が最も少ないということであるが、これはトピックが意見文であるということが大きな原因として考えられる。JLE が相対的に志向相を過剰使用し、完了相を過少使用している点については、前述の分析からも明らかである。

最後に、3 点目は、完了相にのみ有意な線形変化が見られたということである。習熟度ごとの相なし・進行相・志向相の調整頻度に行った回帰分析のそれぞれの説明力は順に、 $r^2=.026$ 、 $=.077$ 、 $=.038$ となり、有意な変化はなかったが、完了相については、 $y=-0.867x + 9.93$ ($r^2=.943$)となり、有意に頻度が減少することが明らかとなった。全体的に過少使用である完了相の頻度が習熟度の上昇に伴い減少するのは、望ましくない現象である。しかしながら、習熟度の上昇に伴うこの現象

については、未だ原因の解明には至っていないが、線形変化の傾きが極端に大きいわけではなく、また本研究のデータが特定のトピックに基づくものであることを踏まえると、直ちに習熟度の向上が完了相の使用能力の低下を意味するとは断定できない。これを明らかにするには、談話機能や語彙的側面を含めた質的分析を併用し、完了相の使用がどのような意味機能と結びついているのかを精査する必要があると考えられる。

以上をまとめると、RQ2(3種のアスペクトとアスペクトなしの動詞の使用度は、習熟度を異にするJLEおよびENSでどのように変化するか。)に関して、(1)JLEが「相なし」・志向相においてENSの調整頻度を上回り、進行相・完了相において下回ったこと、(2)JLEとENSのアスペクトの構成比は、両者とも「相なし」の構成比が最も高く、「進行相」の構成比が最も低く、JLEが志向相>完了相、ENSが完了相>志向相の順に産出すること、(3)完了相のみ習熟度とアスペクト使用に有意な線形変化が見られたが、傾きは極端に大きいわけではないことが結果として得られた。

4.3 RQ3 テンス・アスペクトの使用度

本節では、RQ3「12種の時制・相の組み合わせパターンは、習熟度を異にするJLEおよびENSでどのように変化するか」に答えるため、表4に示した3種のテンス(現在・過去・未来[モダリティ時制])×4区分のアスペクト(相なし・進行相・完了相・志向相)の計12パターンについて検討する。なお、表4の調整頻度は前節と同様に10名あたりの産出頻度であり、括弧内にその実頻度を記している。

表4

12種のテンス・アスペクトの組み合わせパターンの調整頻度

		単純現在形		現在進行相		現在完了相		現在志向相	
		調整 頻度	構成比	調整 頻度	構成比	調整 頻度	構成比	調整 頻度	構成比
	A2	174.68 (2690)	63.47%	3.25 (50)	1.18%	6.56 (101)	2.38%	11.49 (177)	4.18%
	B1_1	165.92 (2970)	62.09%	4.08 (73)	1.53%	6.26 (112)	2.34%	10.11 (181)	3.78%
書	B1_2	171.63 (841)	63.52%	5.31 (26)	1.97%	6.12 (30)	2.26%	11.63 (57)	4.30%
き									
手	B2+	175.56 (316)	64.23%	3.89 (7)	1.42%	4.44 (8)	1.62%	10.56 (19)	3.86%
群									
	JLE	171.95 (1704)	63.33%	4.13 (39)	1.52%	5.85 (63)	2.15%	10.95 (109)	4.03%
	平均								
	ENS	59.9 (1198)	55.36%	4.50 (80)	3.70%	8.55 (135)	6.24%	3.45 (69)	3.19%

		単純過去形		過去進行相		過去完了相		過去志向相	
		調整	構成比	調整	構成比	調整	構成比	調整	構成比
		頻度		頻度		頻度		頻度	
書き手群	A2	15.65		0.26		1.3		0.19	
		(241)	5.69%	(4)	0.09%	(20)	0.47%	(3)	0.07%
	B1_1	15.59		0.22		1.79		0.22	
		(279)	5.83%	(4)	0.08%	(32)	0.67%	(4)	0.08%
	B1_2	16.94		0.61		1.22		0.61	
		(83)	6.27%	(3)	0.23%	(6)	0.45%	(3)	0.23%
	B2+	12.22		0		1.67		0	
		(22)	4.47%	(0)	0.00%	(3)	0.61%	(0)	0.00%
	JLE	15.1		0.27		1.5		0.26	
	平均	(156)	5.57%	(3)	0.10%	(15)	0.55%	(3)	0.09%
ENS	6.2		0.2		0.75		0.55		
	(124)	5.73%	(4)	0.18%	(15)	0.69%	(11)	0.51%	
		モダリティ時制 (未来)		未来進行相		未来完了相		未来志向相	
		調整	構成比	調整	構成比	調整	構成比	調整	構成比
		頻度		頻度		頻度		頻度	
書き手群	A2	59.03		0.13		1.82		0.84	
		(909)	21.45%	(2)	0.05%	(28)	0.66%	(13)	0.31%
	B1_1	61.17		0.17		1.4		0.28	
		(1095)	22.89%	(3)	0.06%	(25)	0.52%	(5)	0.10%
	B1_2	54.29		0.2		0.82		0.82	
		(266)	20.09%	(1)	0.07%	(4)	0.30%	(4)	0.30%
	B2+	63.33		0		1.11		0.56	
		(114)	23.17%	(0)	0.00%	(2)	0.41%	(1)	0.20%
	JLE	59.46		0.13		1.29		0.63	
	平均	(596)	21.90%	(2)	0.05%	(15)	0.47%	(6)	0.23%
ENS	24.45		0.3		1.05		0.6		
	(489)	22.60%	(6)	0.28%	(21)	0.97%	(12)	0.55%	

まず、JLE と ENS の全体の傾向を概観する。表4より、JLE は現在単純形・現在志向相・過去単純形を相対的に過剰使用していること、現在完了相を相対的に過少使用していることが明らかとなった。現在単純形および過去単純形の共通点は、「相なし」であることで、前章の分析通り、進行相や完了相で書くべき内容を現在単純形や過去単純形を用いて産出していることが一因として考

えられる。前章の分析通り、JLE の現在志向相の過剰使用は“want to”などの願望の定型的用例の過剰使用に起因するものだと考えられる。

また、JLE の構成比の平均および ENS の構成比は、その両者が 1%未満の場合はデータ数不足として分析から省くとすると、JLE は現在単純形(63.33%)>未来(21.90%)>過去単純形(5.57%)>現在志向相(4.03%)>現在完了相(2.15%)>現在進行相(1.52%)の順で産出するが、ENS は現在単純形(55.36%)>未来(22.60%)>現在完了相(6.24%)>過去単純形(5.73%)>現在進行相(3.70%)>現在志向相(3.19%)の順で産出することが明らかとなった。ここでもやはり強調されるべき点は、JLE の現在志向相の過剰使用と現在完了相の過少使用で、これは前章の分析結果を裏付ける結果であると考えられる。

最後に、JLE の習熟度上昇に伴う各パタン¹の線形変化について、現在完了相と未来完了相のみが説明力で高い値を示した(現在完了相: $y = -0.65x + 6.82$, $r^2 = .773$ 、未来完了相: $y = -0.271 * x + 1.69$, $r^2 = .672$)。しかしながら、どちらも線形の傾きは大きくなく、また未来完了相については、絶対数も高くないため、有意な傾向が認められるとは言い難い結果となった。

以上をまとめると、RQ3(12 種の時制・相の組み合わせパタンは、習熟度を異にする JLE および ENS でどのように変化するか。)に関して、(1)JLE が現在単純形・現在志向相・過去単純形を過剰使用し、現在完了相を過少使用すること、(2)すべてのパタンにおいて、習熟度の上昇とテンス・アスペクトの使用の間に有意な傾向が認められなかったことが結果として得られた。

5. まとめ

本稿では、日本語を母語とする英語学習者および英語母語話者のテンス・アスペクトの使用を計量的に分析することで、JLE のテンス・アスペクトの使用実態の解明を試みた。

以下、調査によって明らかになったことをまとめる。まず、RQ1(テンスの使用度)については、(1)動詞そのものの頻度は ENS に比べて JLE がきわめて高いこと、(2)JLE と ENS の 3 種のテンスの構成比に大きな差はないこと、(3)習熟度とテンス使用に有意な相関関係はないことが明らかとなった。続いて、RQ2(アスペクトの使用度)については、(1)JLE が「相なし」・志向相において ENS の調整頻度を上回り、進行相・完了相において下回ったこと、(2)JLE と ENS のアスペクトの構成比は、両者とも「相なし」の構成比が最も高く、「進行相」の構成比が最も低く、JLE が志向相>完了相、ENS が完了相>志向相の順に産出すること、(3)完了相のみ習熟度とアスペクト使用に有意な線形変化が見られたが、傾きは極端に大きいわけではないことが結果として得られた。最後に、RQ3(テンス・アスペクトの使用度)については、(1)JLE が現在単純形・現在志向相・過去単純形を過剰使用し、現在完了相を過少使用すること、(2)すべてのパタンにおいて、習熟度の上昇とテンス・アスペクトの使用の間に有意な傾向が認められなかったことが明らかとなった。

冒頭でも述べたように、英語の書き言葉は多様なテンスやアスペクトによって特徴づけられるが、母語において英語と同じテンス・アスペクトの体系を持たない日本人学習者にとって、これらの習得や自然な運用は大きな課題となりうる。この点については、多くの先行研究があるものの、日本

人英語学習者が実際にどの程度の問題を抱えているのか、英語母語話者とどのような違いがあるのか、また、学習者の習熟度の上昇に従ってそれらの使用パターンがどのように変化していくのか、という点については、必ずしも研究が十分ではなかった。この点に関し、大規模な学習者コーパスデータを基盤として行った本研究は、これらの問いに答える上で一定の基礎資料を提供したものと考える。

しかしながら、本研究には残された課題も多い。ここでは、3 点に絞って言及する。まず 1 点目は、分析したデータが相対的に少なかったということである。ICNALE はアジア圏の学習者コーパスとしてはかなり大きなものではあるけれども、日本人学習者の多様性を考える場合に大学生データ 400 人だけの分析で日本人英語学習者の全体が語られているわけではない。例えば高校生や他の幅広い日本人英語学習者のデータを追加してより多角的に研究を進め、今回の研究で得られた結果がそうした他の日本人データでも同様に確認できるかの再現性の確認は不可欠であると言える。2 点目は、本研究は日本人英語学習者に焦点を合わせたものであったため、その他の学習者との比較が十分に行えていないことである。Granger (2015) の *Contrastive Interlanguage Analysis* の枠組みでも強調されるように、学習者と母語話者の比較のみならず、背景を異にする学習者間の比較から得られるものも多い。例えば、今回得られた結果が日本人学習者のみに適用されるものであるのか、あるいは他の国や地域の学習者に共通する傾向が存在しているのかどうかという点を明らかにするためには、ICNALE に含まれている他の EFL または ESL のデータを比較分析し、本研究で得られた特徴を日本人特有のもの、あるいは他の国や地域でも共通しているものに分類する必要があるだろう。特に日本人向けの英語教育におけるテンス・アスペクトの方向性を考えていく上で、この点を解明することは不可欠な過程になると言えるだろう。3 点目は、本研究は探索的研究を旨としたため、調整頻度を基盤としたいわゆる表面上の比較にとどまっている。もちろんその中には統計的に差があるものもあれば、そうでないものもあると思われる。この点については、今後、例えば習熟度のレベル間の差は明らかにするためには、一元配置分散分析などの統計手法を検討するべきであろう。

研究インテグリティ宣誓

本稿著者は、本論文が著者自身によるオリジナルの研究成果であって、他者の著作物の剽窃や盗用、データの捏造や改竄、二重投稿、貢献度を反映しない著者名表記といった一切の不適切行為を行っていないことを宣誓する。なお、生成 AI に関しては、下記の目的でのみ限定的に使用した。

(1) 日本語表現の正確性の確認

ただし、生成 AI の出力をそのまま論文に引用することを含め、研究インテグリティに抵触する可能性がある行為は一切行っていない。

引用文献

- Biber, D. (1993). Using register-diversified corpora for general language studies. *Computational Linguistics*, 19(2), 219-241.
- Comrie, B. (1976). *Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge University Press.
- Council of Europe. (2020). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment – Companion volume*. Council of Europe.
- France, L. R. (2026, February 6). Bad Bunny doesn't need the NFL as much as the NFL needs him. *CNN*. <https://edition.cnn.com/2026/02/05/entertainment/bad-bunny-nfl-super-bowl-halftime-show>
- Granger, S. (2015). Contrastive interlanguage analysis: A reappraisal. *International Journal of Learner Corpus Research*, 1(1), 7-24.
- Ishikawa, S. (2023). *The ICNALE Guide: An introduction to a learner corpus study on Asian learners'L2 English*. Routledge.
- Leech, G., & Svartvik, J. (2002). *A communicative grammar of English*. (3rd ed.). Pearson Education Limited.
- 三宅英文 (2015). 「英語における時制と相の関係」. 『安田女子大学紀要』. 44, 31-40.
- 田川憲二郎 (2020) 「時制とアスペクトの仕組みを明確にする: 学習英文法のフォーマット」. 開拓社.
- Thakur, V. S., Sulaiman, M. A., & Elahi, E. (2021). Review of the English tense system: Decoding dichotomies and restructuring instructional practice. *English Language Teaching*, 14(4), 77-86.
- Wang, G., Wang, H., & Wang, L. (2024). Exploring the development of progressive construction in Chinese and Japanese EFL writing: A usage-based approach. *TESOL Quarterly*, 59(7), 943-975